

ながやす

ほんちようしよくかん

岡部長泰と『本朝食鑑』

本書には、著者の自序の前に、大学頭林信篤、岸和田藩主岡部長泰、著者の兄・人見竹洞の三つの序文がある。そのうち、岡部長泰の序文は別掲してある。

末尾の「元禄乙亥夏五」は元禄五年（一六九五）の夏五月であ

あざな

る。「伯将」は、三代藩主岡部美濃守長泰の字である。

この序文によると、長泰が幼少のころ多病であつたが、幸いにいつも著者の父・人見元徳（随祥院法印元徳先生）の治療を受け、その効果があつて、長ずるにしたがい強健な身体になることができたということである。そのちなみで、この人見一家とまた著者とも親密で長いつきあいがあるので、信篤と友元、また著者自身の序文に本書の値打ちは十分いい尽くされていると思うが、あえて一言私の気持ちをここに述べる次第だということである。

著者の父、人見元徳は小児科医として名高い人で、もとは宮

とももとい

中御用の医師であつたが、幕府に招かれた。その長男友元（号、竹洞）は林道春（号、羅山）の門人で、幕府に仕えた。二男が必大である。父の医業を継ぎ、延宝五年（一六七七）から御番勤仕となつていた。

著者が岡部長泰に序文を求めたこと、長泰が別掲のような内容の序文を与えたことから察すると、長泰が本書の出版の費用

ながちか

を与えたに相違ない。のちに、十一代藩主岡部長慎が「先君伯将侯は、はなはだ医事を好み、かつて野必大の本朝食鑑をして、これに序す」と記している（『重訂本草綱目啓蒙』序）ことがこのことを傍証している。